

臨地実習という後輩の育成を通して臨床看護師の指導力を高める

佐賀大学医学部附属病院 中野 理佳

【概要】

臨床現場で必要とされている臨床実践能力と看護基礎教育で習得する看護実践能力との乖離が問題となっている。臨地実習においては、対象者にケアを提供しその反応によりケアの妥当性を検証し、計画を修正するという看護過程の展開を通して看護実践能力が培われる。そのため基礎教育において臨地実習は極めて重要であると考え。当院でも昭和 59 年より臨地実習を受け入れ、平成 7 年より学校側との連携を深めるために臨地実習指導担当者を各部署に 2 名配置した。しかし、臨地実習についての体制や役割等明文化した物もなく、さらに臨地実習指導担当者は日勤でないことが多いため実習に関わることが少なくモチベーションも低い状態であった。また、臨地実習は学生のためとだけ捉える負担感が大きく、臨床側の指導力を振り返ることも少ない状況であった。臨床看護師にとって指導力は臨床実践能力として必要不可欠なものであり、実習指導をとおしてそれらを高めることができると考え、臨床側の体制整備に取り組んだ。「臨地実習指導体制に関する申し合わせ」を作成し、看護師長会議を通して周知させた。その結果、臨地実習指導担当者の日勤配置率が昨年より上昇した。また、今年度より臨地実習指導担当者連絡会を 2 回開催し、看護学科教員も含め情報交換を行った。成果として、自分たちの指導について振り返ることができ、看護学科教員との連携強化につながった。

【背景】

当院では昭和 59 年より臨地実習を受け入れ、平成 7 年より学校側との連携を深めるために臨地実習指導担当者を各部署に配置した。しかし、臨地実習の取組みとしては年に 1 回研修を実施するだけで、臨地実習についての体制や役割などの明文化もなく、勤務体制も整っていないためモチベーションも低く、負担感を感じていた。学校では看護過程の学習は、ペーパーペーシエントで看護計画の実践前までしかできない。その後の実践やその成果については実習で学ぶこととなり、学生にとって臨地実習は授業の一貫であり、いかに効果的な学習の場ができるかは臨床側の課題である。臨地実習指導は学生のためだけではなく、臨床看護師は教えることを通して自分も成長できると考える。指導という学生とのやり取りを通し、自分を振り返ることで学び直し、成長することができる。教育担当の副看護部長として、臨地実習の指導体制を整え、臨床看護師、学生双方が成長できる環境を整える必要があると考えた。

【実践計画】

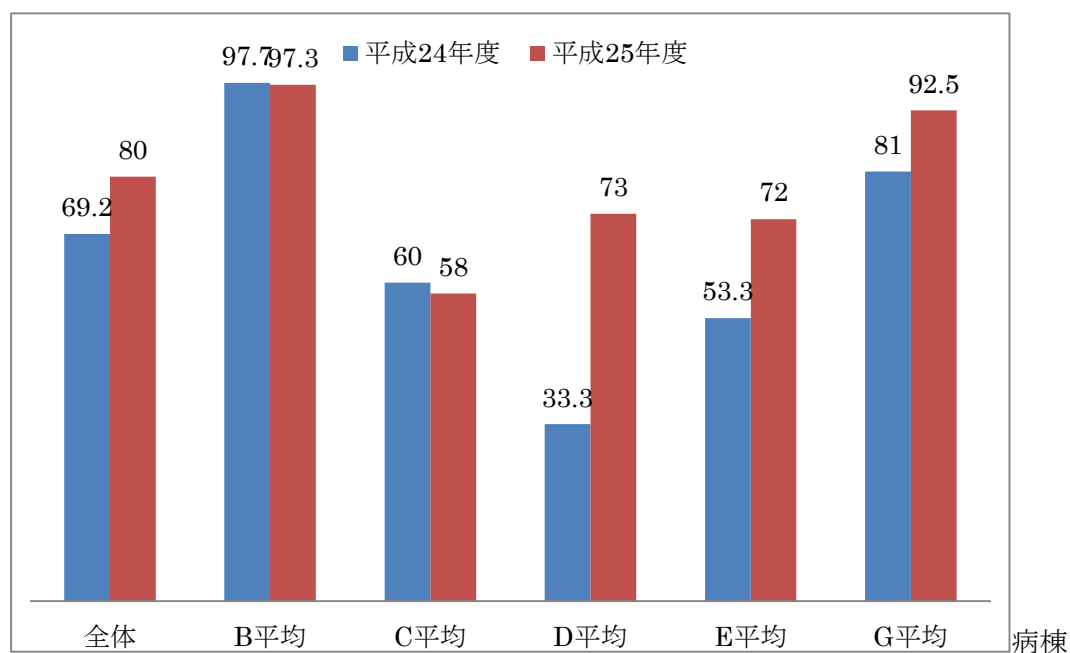
1. 「臨地実習指導体制に関する申し合わせ」を基に臨床側の体制を整備する。
 - 1) 臨地実習指導担当者が役割を果たすことができるように勤務調整を看護師長に依頼する。
 - 2) 臨地実習指導担当者が来年度からインセンティブ対象となるように病院長に交渉する。
 - 3) 10 月から、平成 26 年度の「臨地実習指導講習会」の受講者を募り、今年度中に決定する。
2. 臨地実習指導担当者が「臨地実習指導体制に関する申し合わせ」に沿って役割を果たす。
 - 1) 今年度の実習スローガンを「学生をチームメンバーとして迎えよう」「学生にケアの根拠と価値を語ろう」とし、10 月に部署での取組を決め 12 月・3 月に評価する。
 - 2) 12 月・3 月に連絡会を開催し、臨地指導担当者と看護学科教員で成果や課題について情報を交換する。

【結果】

1. 体制整備について

- 1) 9月の看護師長会議にて「臨地実習指導体制申し合わせ」について説明し、体制について依頼した。「臨地実習指導体制申し合わせ」を、各部署に看護師長用、副看護師長用、臨地実習指導担当者用、部署用として配布した。
- 2) 実習中の臨地実習担当者の日勤率が平成24年度69.2%、平成25年度80%であった。成人実習担当病棟において日勤率が上昇した。

病棟別臨地実習指導担当者の日勤率



2. 役割遂行について

- 1) 看護師長会議でスローガンについて説明し、部署の取り組みについて提出を依頼した。
- 2) 9月に臨地実習指導の研修会を実施した。看護学科の教員も参加し、実習環境や指導者の役割等についてのディスカッションを通して連携を深めた。
- 3) 12月に連絡会を行い、前期の実習について情報交換を行った。臨地実習指導担当者19名、教員9名が参加した。臨地実習指導担当者をフリー業務とし担当させる部署があった。実習前に教員によって学生が学んでいる看護過程について説明があり、スタッフが学生のレディネスを理解できた。看護ケアの根拠について学生と語りあいを通して学生が自分の課題を考えるようになったなど意見があった。また、連絡会の時間は1時間では短いという意見が聞かれた。
- 4) 3月に連絡会を行い、1年間の実習について成果や課題について振り返った。臨地実習指導担当者19名、教員9名が参加した。指導内容や連携について振り返りを行った。臨床側からは効果的な指導方法や非効果的な指導方法について、臨地実習指導体制について等12月より自分たちの振り返りができていた。また、臨床側に指導について学生の反応を教員がフィードバックすることによって指導についての効果がわかりモチベーションが上昇するなど意見があった。学科側からは、以前より臨地実習指導担当者が日勤しているため実習の調整がしやすい、指導が継続的にできるなどの意見があった。

- 5) 3月の連絡会にて臨地実習指導担当者19名、教員9名に学生指導や連携等についてアンケート調査を行った。その結果、学生指導について「実施したケアについての振り返り」「学生の能力や準備に応じた指導」「学生の想いの受け止め」「学生の考えの引き出し」等が低い評価であった。また、部署内の連携については、臨地実習指導者担当者としてのスタッフへの関わりが全体的に低い評価であった。
- 6) 平成26年度の「臨地実習指導講習会」の受講者の申し込みがなかった。原因として、臨地実習指導者や講習会の内容についての理解が不十分であることが考えられた。

【評価及び今後の課題】

1. 体制整備について

昨年と比べ臨地実習指導担当者の日勤率が上昇し役割を果たしやすい環境が整いつつある。教員からも昨年度に比べ臨地実習指導担当者がいるので相談や調整がしやすいという評価があった。しかし、アンケートによると「実習期間中に、指導に専念できる勤務体制が整えられている」と回答した臨地実習指導担当者は、58%であり引き続き勤務調整の充実が必要である。

連絡会を今年度2回行うことで、他部署の取組みや工夫等を知ることができた。内容や時間等については、検討が必要である。

また、臨地実習指導担当者は、キャリアパスとしての位置づけの周知が必要である。

2. 役割遂行について

実習受け入れ準備が整ってきた。そのため学生把握ができ学生の質問が増えた。ケアの根拠を学生と語り合う時間がもてたなどが意見としてあり、臨地実習の申し合わせ事項を作成したことで役割について共通認識ができた。指導内容については今後どのようにスキルを身につけていくのかが課題である。